自然のものが入った慣用句　三年一組　今井　光

僕は、自然のものが入った慣用句について調べました。

調べてみると、自然のものが入った慣用句の中でも特に多いのは、「火」と「水」であることが分かりました。僕はこのことから、昔の日本の明かりだった「火」や、毎日飲む「水」という、人々の生活の中で特に身近な自然がたくさん慣用句になっているのではないかと思いました。

それでは、僕が調べた慣用句の中から、二つ皆さんに紹介します。

みなさんは、「火花を散らす」という慣用句を知っていますか。この慣用句の意味は、互いが激しく競い合うことで、使い方の例としては、「A君とB君は火花を散らしている」というようにして使います。

僕は、この慣用句がどのようにしてできたのかを考えるには、火打ち石を想像してみればいいと思います。

火打ち石は、昔の日本人が火をおこすのに必要だった道具です。二つの石をたたいて、その時に出る火花で火をつけます。その時にどちらかが軟らかければ、硬い方の石に負け、割れてしまい、火はおこりません。

このように、同じ硬さの石がぶつかり合って火花がおこることを人にたとえて、互いが激しく競い合うという意味になったのではないかと思います。

二つめは、「水の泡」という慣用句です。この慣用句は皆さんも使ったことがあるでしょう。意味は、努力が無駄になることで、使い方の例は、今までの練習が怪我で水の泡だというようにして使います。

この慣用句は、昔の人が、水の泡が一瞬にして消えていく様子を見て、長年努力したものが無駄になるのが一瞬だということと似ていると思ったのではないかと思います。

ご清聴ありがとうございました。